

【使徒書日課】使徒言行録 2章22～36節

「²²イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおりです。²³このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。²⁴しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。²⁵ダビデは、イエスについてこう言っています。

『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。

主がわたしの右におられるので、

わたしは決して動揺しない。

²⁶だから、わたしの心は楽しみ、

舌は喜びたてる。

体も希望のうちに生きるであろう。

²⁷あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、

あなたの聖なる者を

朽ち果てるままにしておかれない。

²⁸あなたは、命に至る道をわたしに示し、

御前にいるわたしを喜びで満たしてください。』

²⁹兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあると、はっきり言えます。³⁰ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。³¹そして、キリストの復活について前もって知り、

『彼は陰府に捨てておかれず、

その体は朽ち果てることがない。』

と語りました。³²神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。³³それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。³⁴ダビデは天に昇りませんが、彼自身こう言っています。

『主は、わたしの主にお告げになった。

「わたしの右の座に着け。

³⁵わたしがあなたの敵を

あなたの足台とするときまで。』

³⁶だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。』

【福音書日課】ルカによる福音書 10章17～24節

17七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」¹⁸イエスは言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。¹⁹蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。²⁰しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではいらない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

²¹そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。²²すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかには、だれもいません。」²³それから、イエスは弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたのしているものを見る目は幸いだ。²⁴言うておくが、多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞いたかったが、聞けなかったのである。」

聖霊を注いでくださった！【こども説教のために】

先週、聖霊降臨を祝ったわたしたちは、今日、「聖なる聖なる」と歌う讃美から礼拝を始めました。「聖なる、聖なる、聖なるかな」(『讃美歌 21』351番)。それは、昔の預言者が天上で礼拝する天使らの讃美として聞いた歌です。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う」(イザヤ6:3)、初代教会は、この讃美の歌を天使らと共に歌い、天上の礼拝に加わりました。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主、かつておられ、今おられ、やがて来られる方」(黙示録4:8)。

天に昇られた主イエスがお約束くださった聖霊は、天上から降り、わたしたちに注がれました。天と地がつながれたのです。

聖霊を注がれた皆さん、天上の天使らの讃美の歌声に耳を澄ませましょう。天上の礼拝のただ中に先に加わられた先達を思い起こしましょう。一人ひとりに聖霊の注がれたことを信じるわたしたちも、地上にしながら天上の礼拝に加えていただいているのです。

ご降誕の出来事を思い起こしましょう。主イエスは、母マリアに聖霊が降ってお生まれになり、神の子と呼ばれるお方になりました(ルカ 1:35)。教会にも聖霊が降って、わたしたちは新しく生まれる者とされたのです。「神の子」と呼ばれる者として新生されたことを、互いに祝い合うのです。

「父・御子・聖霊」

聖霊降臨の祝い、「ペンテコステ」の翌主日を、教会は「三位一体主日」と呼んで記念してきました。

「三位一体」、つまり「父・子・聖霊」という御名をもって、わたしたちは、信じるお方をお呼びします。洗礼〔バプテスマ〕に際して、司式者は「父・子・聖霊の御名によって」と告げて志願者に水を注ぎます。

洗礼を受けた信者の皆さんにとって、この「父・子・聖霊」という御名は、あらためて説明される必要もないものでしょう。主イエスが「天の父」とお呼びになられたお方、その「御子」であられる主イエス、そして主イエスが与えられるとお約束くださった「聖霊」、この三つがひとりの神でいらっしゃるのです。

けれども、信者の皆さんと話していると、ときどき漏れ聞こえてくることがあります。「天の御父はわかる。御子イエスさまもわかる。でも、聖霊がよくわからない」という訴えです。だからでしょうか、「クリスマス」や「イースター」に比べて、「聖霊降臨」の祝いである「ペンテコステ」に集まる者が少ないのは。

たしかに、主イエスが、弟子たちと宣教の旅を重ねられた日々の中で、「聖霊」について教えられることは、少なかったようです。弟子たちの関心も、もっぱら主イエスその方にありました。このお方が、自分たちの信じる神を「天の御父」とお呼びになられ、「神の子」のようにふるまわれることが、不思議でもあり、魅力でもあったのです。

はじめは、ほかの「ラビ」たちと同じように「教師」の一人と見ていたかもしれませんが、次第に、その教えや為せるわざは「神の子」のそれであると思わずにいられなくなっていったのです。主イエスに任命されて、主イエスに先んじて町や村に遣わされ、宣教活動をした七十二人の弟子たちの中には、「**主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します**」と報告する者もありました。そのような弟子たちの感覚は、聖霊降臨後の教会が歩み始めてからも、それほど変わらなかったかもしれません。使徒たちは、しばしば、「**ナザレの人イエス・キリストの名**」（使徒 3:6、同 4:10 など）によって、奇跡を行い、また救いを告げたのです。

端的に言って、わたしたちキリスト信者は、「主イエス」というお方の「ファン」のようなところがあるのです。「主イエスに従う」というのは、今どきの言い方をすれば、「追っかけ」であり、「推し活」です。

それで十分なようにも思えます。ところが、主イエスは、墓から消え、弟子たちの前で天に昇られて地上からも見えなくなられたのです。ただ、「聖霊」の約束を残して。「聖霊が降るのを待ちなさい」と言い残されて。

「あなたがたの名は天に書き記されている」

おかしな言い方かもしれませんが、弟子たちが経験した主イエスのご復活と昇天の出来事は、「主イエスの現役引退」でした。その引退に際して主イエスは、ご自分が引退する代わりに「弟子たちのデビュー」を促されたのです。現役引退された主イエスの後継者として弟子たちがデビューすること、それが「聖霊降臨」の出来事でした。

もちろん、主イエスと弟子たちとは、まるで格が違います。「使徒」と呼ばれるような弟子であったとしても、主イエスと同等の者とはなり得ないでしょう。それでも、彼らは、主イエスと数年間、寝食を共にした者たちです。一人ひとり、主イエスから何かを受け継いでいたでしょう。十二人の使徒たちだけでなく、百二十人の弟子の仲間たちがいました。主イエスがお一人でなされていたことを、十二人で、百二十人で、受け継がせていただくことを願うのは、間違っていないはずです。

そう願う弟子たちに、天に昇られる前の主イエスは、「聖霊」の与えられることを約束くださったのです。

それは、「父が約束されたもの」(ルカ 24:49) です。「高い所からの力」(同)なのです。主イエスの母マリアは、「聖霊があなたに降り、いと高き力があなたを包む」(同 1:35) と天使に告げられて、主イエスを身ごもりました。主イエスご自身も、洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになられたとき、「天が開け、聖霊が鳩のように見える姿で…降って来た」(同 3:21~22) という経験をなさいました。四十日の荒れ野の誘惑を受けられたのも、「聖霊に満ちて」(同 4:1) 導かれたものでした。そして、宣教に派遣した弟子たちが、期待通りの経験をして帰って来た時には、「聖霊によって喜びにあふれて」、「天地の主である父」をほめたたえたのです。

だから、「聖霊」の御名は、「父」と「子」の御名と共にほめたたえられるのです。恐れ多いことに、主イエスは弟子たちに、「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」とおっしゃいました。それは、ただ、天上の救いの名簿、「命の書」にその名が記されている、ということではないでしょう。「あなたがたの名は、天上の名とされている」というのです。「御父」の御名と共に、「御子」の御名と共に、「聖霊」の御名と共に、天上の名とされている。なぜならば、「聖霊」は、注がれたからです。「聖霊」の御名のゆえに、「聖霊」の注がれることを信じる者の名も天上の名とされるのです。

「聖霊」は、すべての者のために降りました。これを鳩の姿のように見て、信じ、受け入れる者は、主イエスと一つに結ばれています。洗礼によって結ばれています。されば、たとえ主イエスの姿が見えなくても、主と結ばれた者らの教会と共に、「父・子・聖霊」の御名を汚さぬ道を行くでしょう。